



阿部亘先生『李贽 :明末〈異端〉の言語世界』(早稲田大学出版部 2022)

杜絡嘉(東北大学・大学院研究生)

問題意識

- ・〈伝わらなさ〉: 儒学の根底にある焦慮
- ・言語への疑い
- ・宋学の問題意識: 古の〈絶学〉への〈継承〉(〈道統〉論の展開、「格物」による「理」の体得)
- ・陽明学: 「心」の絶対優位、言語氾濫への警戒
- ・李贄: これまでの儒学の発展と同じ地平に、〈伝わる〉を懐疑しながらその可能性を誰よりも欲しい



本書の手がかり: 李贄の言語への懐疑とその上に構築された言語観

新しい李贄像構築の試み

・先行研究の李贄像：①「反書物主義」者と読書家の両面を持つ （島田虔次）



「心学」の「現状肯定」に起因するにとどまる

②「求道」者としての李贄 （溝口雄三）

③近代性ではなく、伝統の延長線にいる李贄（読書・〈読み〉・文学）

・本書：近代性ではなく、〈伝わらなさ〉という問題を徹底的に考え抜いた思索者としての李贄

第一章 言葉は如何に機能するか

第一節 言葉という陥穽——言語のよそよそしさ

・言語の虚構性:「名」と「実」の乖離



儒学の伝統

・生まれながらの「童心」(真心)の喪失:既成の均質の言語活動に由来する

「執一」としての三教「経書」(<死本>)への批判



聖人への不信



経書と聖人との関係性の疑い

第二節 非識字者の論理性

- ・非読書人の道徳性
- ・読書の士大夫の不徳



読書の意味への反省

第三節 読むことと学ぶこと

- ・聖人:己の〈性命〉(天より賦与される生得の本性)を知る人



黙々たる悟達にある

- ・読書への肯定:自身の衝動的かつ受動的なこと(〈不容已〉)



一回性の出来事



餓えに対する食糧、病に対する薬

第四節 書くことと教えること

- ・聖賢の書くこと: <発憤>



受動的な出来事が契機となつてのやむをえざる行い

- ・「経」: やむを得ない<言教>  その場だけで意味を持つ(言語の機会性)

第五節 時と出逢う言葉

- ・「言」: 「人」と「時」によって変容する

- ・『易』と『中庸』の特権性: 言葉と行いの一致

- ・「性命」は沈黙のうちにある (言葉は顔のように違う)  本質的に意味は同じ

- ・「古今」言説の同質性と「道」の常在  「道統」説への否認

・言語は内なるものと紐帯を持つ。そして、誰かの吐いた肺腑の言は、誰かの内に入る可能性を持つ。彼はこうした疎通の可能性を語る時、身体的な反応へのアナロジーを用いる。寒さに凍えるように語り、渴きに喉を潤すように読むこと——止むに止まれぬ衝動のなかで言語に対峙する時、疎通は可能になるだろう。彼は言語が本質的に持つ不確実さや、状況如何と無縁な一定化の傾向——それらの弊害を認識しながらも、言語による伝達の可能性に抗しがたい誘惑を感じていた。(p105—106)


第二章 師はどこにいるのか

・師に自任することへの批判



理由: ①当時の腐敗した師弟関係、利益集団としての師弟への批判である (講学)



②<性命>の学と好んで師となる精神の相容れないこと、「著書立言」への批判、学者の「心」をさまたげる言語を創り出すことへの批判

聖人の師たること: 迫られて師となったに過ぎなかった

・孔子と顔回の関係: 師弟の「実」  抑えようのない「好学」: 「有道」を求めため、自然に奔走する (「自立」)

師たるべき者: 弟子たることを説き、「好学」の人

 「師」の起源とみなす  彼の言語論と同じ構造

 師弟関係 (非対称的): 相互的な社会関係ではなく、「好学」の人同士の関係  師 = 友

第三章 政治の場での語り

- ・「君子」の排他性(君子の自己満足): 宋の党争を例とする(王安石の変法)



「小人」より国家を誤る



「小人」を捨てるべからず、「君子」と「小人」を共に使うべき



天地のあり方に合う(多様性の認め)

- ・諫言の限界: 名声のための「死諫」への批判(動機の純粹性の求め)

節義の顕現: 国家敗亡の兆候
離間になる事態)の認め

やむを得ない激情による諫言した人々への同情と限界(君臣の

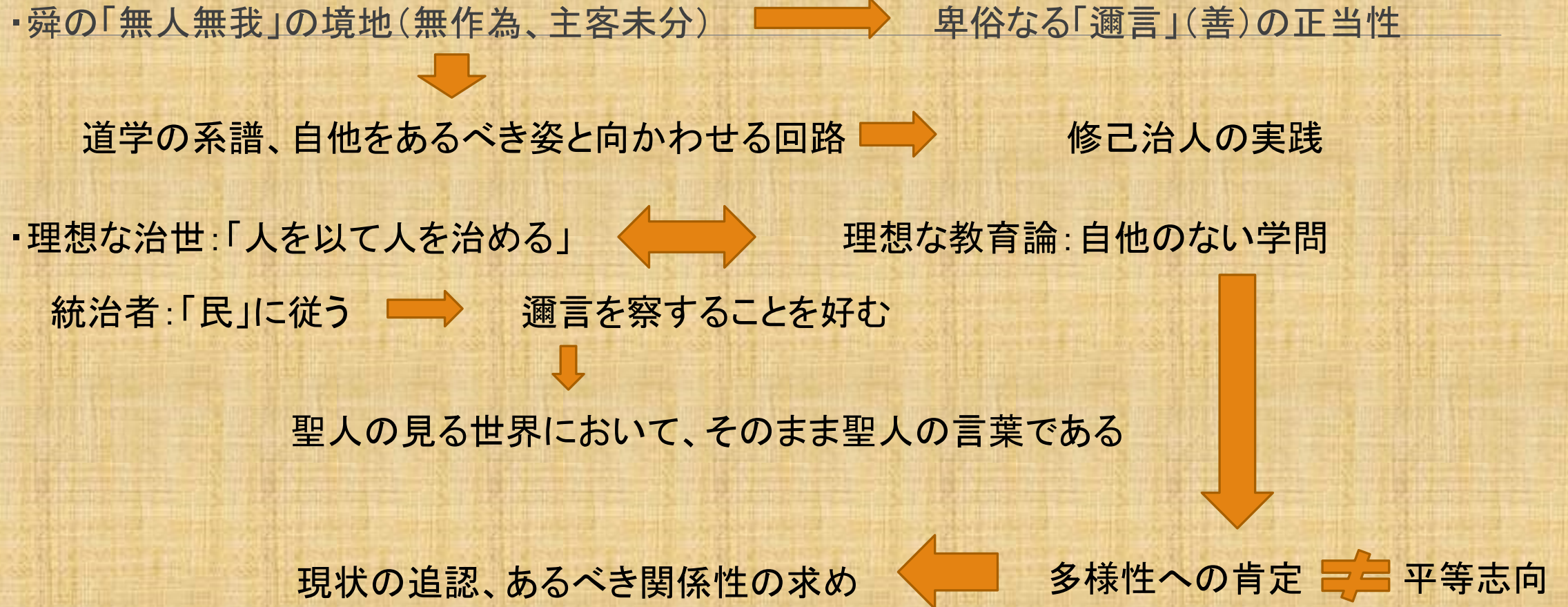
- ・「曲」と「直」を混ぜる言説の戦略への肯定



言語の可能性を求める探索

- ・李贄の諫言論: 万暦中期の政治風潮と繋がる

第四章 他者によりそう



第五章 詩文に託されたもの

・「経」と詩文の並列化：同じ〈言葉〉



小説・戯曲の肯定：「鑑戒」・「風化」機能への期待



感受性をきり捨てず、新たな秩序の編成



〈欲望肯定〉、儒教倫理の再定義

・不遇の文人への最大評価（李白と蘇軾）：文章の社会共同体に対する「教化」機能



ならば、李贄は書く人としての自らのこと、〈自己〉の読まれ方・書かれ方をどう考えるか

第六章 自己を語る言葉

・近世儒学の修養論：＜自己＞から聖人に辿る方法 → 反復可能（人間の共通性）

李贄：無限性（状況）と一回性（「跡」）への尖鋭化

← どれぐらい通じる（人：個別で多様な存在）

・歴史への自己投影：歴史人物の分類（共感）

↓
人の資性と状況による運命の類型化（自身の類型化社会化：乱世の「外臣」「直節名臣」）

・重力としての「時」（状況）と「人」（資性） → 多様の可能性を認めるが、両者に限定され

↓
一つの規範、人々の行為を評価する基準

類型化：李贄思考・行為の出発点

→ 明代後期思想の延長にある

第七章 死を語る言葉

・死に対する恐れ：学の起点（剥き出しの己の現し）



三教聖人にも同じ

・死の恐れを超える：生死を共に無化する（道教仏教の語で）（論理）

死の実践：史書の死者たちの事件としての死への思索（「五死篇」）



儒教「好名」教法と「虚名」の繋がりへの批判、しかし「無名」より「有名」



死者としての自己を自意識し、自ら死を選んだ（書物に存在する不朽の自己、未来の知己をまつ）

終章 自由か、束縛か

- ・言語をめぐる思索にもたらしもの：自由か、束縛か

「時」の原理：儒教伝統の延長線

歴史：具現化された「時」

『蔵書』：類型化された人々の〈物語〉



意味づけ、秩序づけ



自他の非対称性の崩れ、自らを眺めた



自己劇化（紀伝体の人間となる）

- ・読まれ続けることによってこそ、永遠の生は保たれる

聞きたいこと

第一章で言及されたように、李贄は身体的アナロジーをよく使った。それは身体を重視することと考えられる。彼の同時代にも、そうした傾向もかなり強い、特に陽明学の泰州学派について、身体を非常に重視した。例えば、李贄の批判した王心齋は、明哲保身論を提出した。これは、かの時代の大礼議に起因する士大夫へ刑罰と繋がるものであろう。ならば、同じ時代にいる李贄は、何故かそれほど身体を重視するのか。これはこのような明代後期の背景と繋がるのか。

一方、身体的アナロジーは、彼の体験重視とも考えられる。そうすれば、彼の思想と彼の体験とはどうやって繋がるのか。例えば、彼はイスラム信仰の家庭で生まれ、最後の死ぬ時の遺書によって、彼はイスラム式の葬式で葬られた。彼の生涯には、イスラムを信仰する痕跡がないが、そういう体験重視の人間が、幼少期の体験を無視することなどは、考えにくいだろう。特に言語に対する不信は、単なる儒学の伝統の延長線とは思わない、でなければ、李贄みたいな人もたくさん出るだろう。他には、とても興味深いのは、彼のマテオ・リッチとの出会い、西洋のものは彼にどのような刺激を与えたのか。後の戴震は、イエズス会の影響を受け、独特な言説をだした。李贄の思想の中には、彼の西洋体験と通じることはありますか。